

令和2年度第1回ローカルファンドを考えるコアメンバー会議 議事録【概要版】

日時：R2.7.27（月）19：00～20：30

場所：西条市役所5階大会議室

■出席者（敬称略）：

渡辺（洋）、鈴木、井澤、藤田、白石、高瀬、遠藤、渡部（俊）、曾我部、野島、石川、櫻井、亀井、竹内、安永

◎曾我部：開会挨拶

◎安永：これまでの会議のふりかえりと提案 【別添資料のとおり】

1 提案内容：

1つ1つの挑戦が実行される社会の実現には、
挑戦者と応援者をつなぐ、「応援をつなぐ存在」（⇒コミュニティ財団）が必要ではないか

～メンバーによる意見（それぞれの活動を通じて）～

◎「応援をつなぐ存在は必要だ」と思う。市民活動をやってきた立場から見て、地域のことを「自分事」として捉える人は少ない。社会的課題の社会的認知がなされていない部分をどうしていくか。現時点では、自らの出来る範囲で始めているが、今後、どのように伝え、広がりをつくるべきか課題を持っている。

◎「地域のことは行政の仕事だ」と考える人は多い。しかし、財政状況がひっ迫する中で持続可能ではない。それを変えていこうとローカルファンド・SIB 事業をおこなっている。市からの補助金だったものを、市民の投資（応援）し事業を実施する仕組み。投資により、より自分事として関わっていると感じられる。自分は活動や参加ができなくても、投資というカタチで応援する人もおり、こういった想いをつなげる仕組みを地域で広げていくことが必要。

◎「お互い様の精神」がすごく大切。ちょっとした助けあいや「お互い様」の関係性の中でまわっていくこともある。それを日常的に実感出来るようになれば、もっといいまちになる。

◎日頃の活動で困っているのは、お金と人が足りないこと。「お互い様」で、助け合っている。頑張っている人がさらに自分の時間を削って成り立っている。最終的には人。

◎ボランティアでの活動が多いが、それにもお金は必要。また、その意志を継ぐ人がいないと、活動は続かない。

2 提案：財団設立に向けた趣旨書の策定について

今年度のコアメンバー会議のゴールとして、コミュニティ財団の設立目的やなぜ必要かということなどを、言葉として最後にまとめたい。次回から、設立趣旨書を意識して話し合っていきたい。

(添付：他地域の3つのコミュニティ財団【島根県雲南市、岡山県、佐賀県】の設立趣旨書を配布。)

～メンバーによる意見～

◎寄付者が、寄附先を指定できるかとか、その他手数料などについては、先に話しあうことで財団のイメージが出来上がるのではないか。その後、財団の目的などの話になると思う。

◎これを決めるのは、市か？

決めるのは市ではなく、このメンバーで、この会議の中で決めていく。

財団の寄附金や助成の仕組みは、一つだけに決めなくとも、今言われた仕組み2つとも実現することも出来る。冠基金と言って、子育て支援など、テーマを決めて寄附受入をしておいて、活動団体に助成を行うことも出来る。そのほか、特定の団体や活動に対して寄附を募る方法もある。

◎この会議の中で、意見が割れたらどうなるか？

⇒みんなが、「こういう方法でやりたい」ということはすべてやっていきたい。出来ることは可能な限りすべて取り入れてやっていくのがいいと思う。

◎財団が出来たとき、事務局はどこが担うのか？

⇒このコミュニティ財団というのは、市民立。市民で立ち上げるものなので、事務局というのは、行政ではなく、今は想定が無い状態。担い手を探していかないといけない状況。

例えば公募をするなど地域の外から呼んでくることもあるかもしれない。

今は、事務局として行政が声掛けをしているが、財団の運営に行政が関わるというのは想定していない。

◎市民が立ち上げる、ということが根本にあると思うが、このメンバーで決めるというと、最初からその市民の参加が出来ていないのではないかな。

⇒今、財団というものを提示しているが、これは、未来に向かっての一つのツールなので、決まりきったものではない。しかし、財団をつくろうとしている段階で、これから方法を工夫して多くの市民に参加してもらいたい。

◎雲南コミュニティ財団の趣旨書が、格式張っておらず非常に分かりやすい。難しい言葉を使わず、誰でも理解しやすいように、ハードルを下げているのだろう。

◎雲南市について、こういったコアメンバー会議のようなものから、応援団を作り、取組を広めていき、設立したという経緯がある。

◎設立趣旨書について、いきなりこのような形が出来たわけではなく、みんなで議論しながら出来たものだと思う。ただ最初に何かしらたたき台のようなものがないと話が進まないから、そういうものを作りましょう、ということですよ。この形に従わないといけないわけではない。

◎これまでの議論から、財団が必要か、そうではないか、といった意見を今日お聞きして、次回へつなげたいが、どうか。

◎まだまだ不明点がある中、必要かどうかの判断を出すのは難しい一方、プレイヤーとしての立場からも、お金やそれ以外の方法でも応援するということが根付くと、「自分事」として捉える人が多くなって地域が変わるというのはすぐ分かる。ただ、もっといろいろなことを話し合った結果として、形になっていくのではないかと思う。

◎組織のこともこれから考えていく中で、「こんなものとても出来ない」という結論になるかもしれない。市事務局としても、構築に向けてとても綿密な議論が必要だと認識している。今年度、財団があればどんなことが出来るか、組織のことも含め、当該コアメンバー会議で議論した上で最終的に「やっぱりこの地域に財団があったほうがいいよね」、ということになってから、必要かどうか結論を出した方が良く考える。

3 まとめ

◎今後はこの「応援をつなぐ存在」を構築すべく、より具体的な議論を行う。

コミュニティ財団の趣旨や活動内容、組織体について議論を深めることで、そもそも本市にコミュニティ財団が必要か、今後の議論を通し、コアメンバーで見極めていく1年とする。